愛知教育大学附属高等学校研究紀要第44号
pp.75～79（March, 2017）

作品創作を通して鑑賞の視点を学ぶ実践

―自作の和歌を用いた作品創作の工夫と鑑賞―

芸術科（書道）　川瀬英幹

国語総合で学ぶ和歌と書道Ⅰにおける仮名を、教科を越えて学習することで、和歌への興味関心の喚起に加え、書道Ⅰにおける作品創作や鑑賞への意欲を高め、新たな鑑賞の視点を獲得させるための実践を構想した。仮名作品の創作を通して、他者の工夫した点を知り、鑑賞や創意工夫への気づきを促すことを目的とした授業実践を報告する。

＜キーワード＞教科を越えた学習　作品創作　鑑賞

１．はじめに

本校生徒は、平成27年度国語総合の時間において、『伊勢物語』をモチーフに、和歌の修辞技法を用いた和歌づくりに取り組んだ。授業内のワークシートで、和歌の解釈・テーマ・和歌に詠まれている場面・自然・風景・イメージ・工夫した点などを記入している。これは、現行国語科学習指導要領〔伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項〕を授業化した実践報告であった。この実践に加えて、芸術科書道の時間でも、伝統的な言語文化への興味・関心を広げつつ、芸術科学習指導要領書道ⅠのＡ表現（３）仮名の書「ウ　単体、連綿の技法を習得し、全体の構成を工夫すること。」や「エ　意図に基づく表現を構想し、工夫すること。」を基に、自作の和歌を仮名作品として創作する授業を構想し、実践した。同じテーマを用いることで、教科を越えて和歌にアプローチし、更なる興味関心を喚起することを目的としている。

２．目標・単元計画・方法

（１）目標

国語総合の授業で作成した和歌を仮名作品にすることで、創作を体験し、作品創作の態度を学ぶ。また、鑑賞の新たな視点の獲得や、鑑賞の態度を育てる。

（２）単元計画

１～２時　ワークシート配布と主意説明、ワークシート【1】～【4】
３～４時　【3】構図と【5】【6】、練習
５～６時　練習と清書
７～８時　鑑賞用台紙作成・鑑賞・まとめ

（３）方法

１）ワークシートの作成

①制作意図の記入

国語総合の時間に作成した和歌とそのワークシートに記入した内容を基に記入させる。

②和歌のイメージや風景を絵に表し、散らしの構図を考えさせる。

古典的な散らし方にはならないが、自身の表現意図を明確にするとともに、鑑賞の際に構図にも意図があるのではないかという気付きに繋げるための作業として取り入れた。

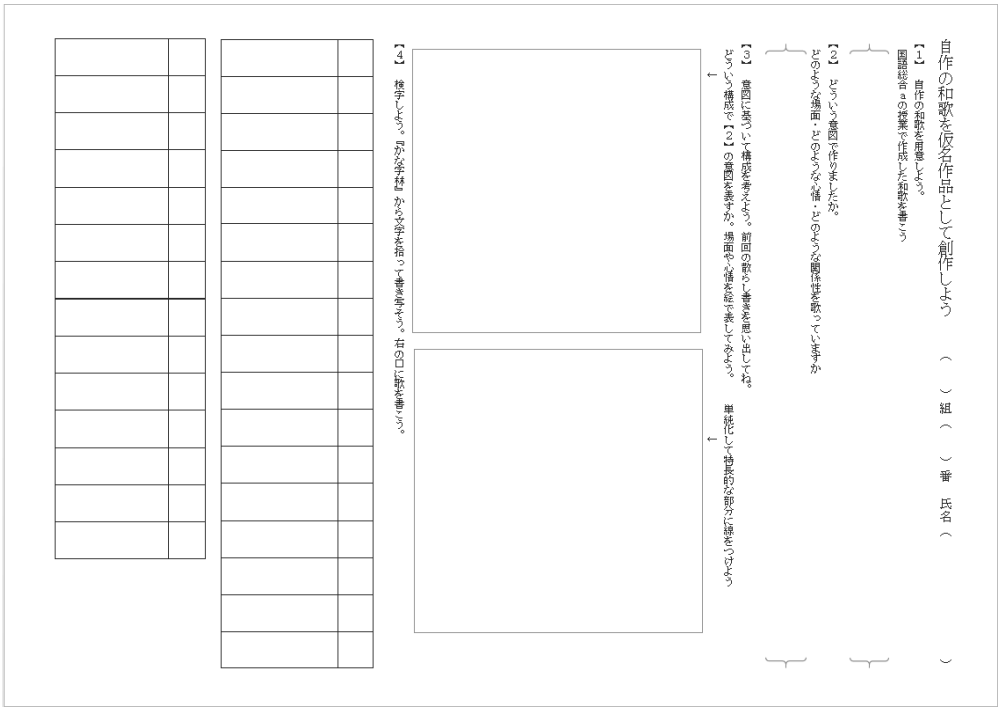
③検字

ひらがなにするのか、変体仮名を使うのか。連綿させるのかどうかを、字書を使用しながら調べさせる。

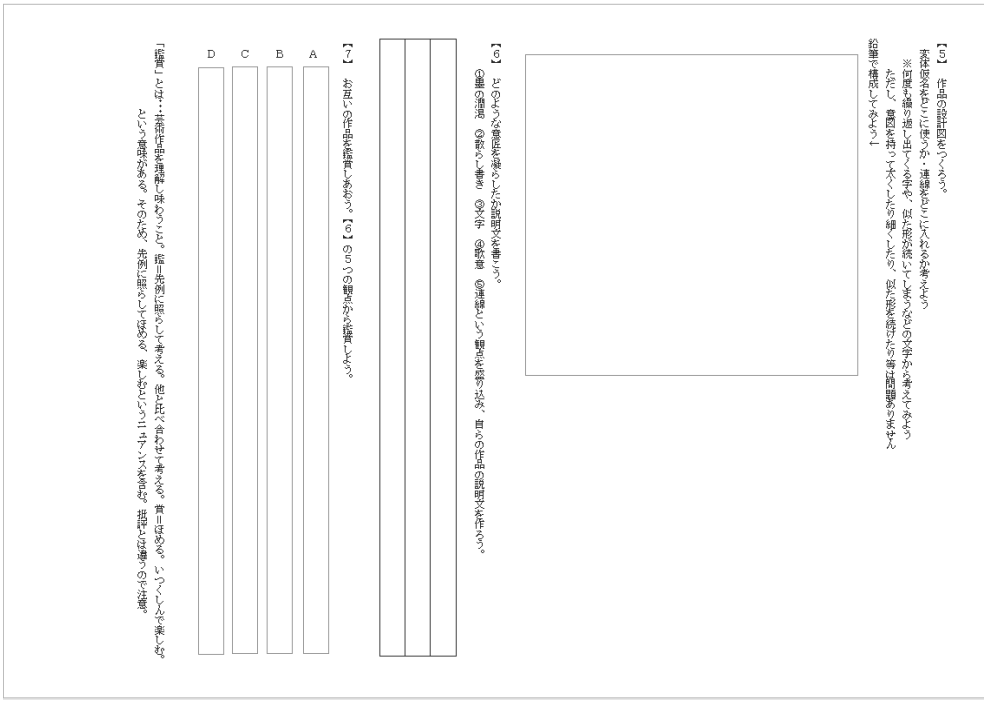
④鉛筆書き

ワークシート内で作品イメージを鉛筆書きで制作してみて、バランスや雰囲気を確認する。

表



裏



２）１次提出

前述の①～④が済んだ生徒から、ワークシートを提出して誤字のチェックを受ける。確認後、ロール紙での練習に入る。

３）練習と清書

ロール紙１/２に縦横自由で練習し、清書する。

４）鑑賞シートの作成

ワークシートに自らの作品の読み・歌意・工夫した点や意匠を凝らした点などを箇条書きにさせる。また、鑑賞用のシートを配布し、清書を貼付させるとともに、箇条書きにしたものを文章化して説明文を作成させる。

５）鑑賞会

書道室内に展示場所を作り、鑑賞会をする。気に入った４作品の鑑賞文と授業の感想を書かせる。尚、鑑賞の際には、何も持たず、自らの席に座っているときのみ、メモや記入を可として実施した。これは、よく作品を観察し、内容を覚えてから着席しなければ鑑賞文を書くことができない。生徒がじっくりと、細部まで作品を観察せざるを得ない状況を作ることを目的としたものである。

３．評価について

ワークシートの内容、鑑賞シート、作品を総合的に評価する。意図を持って制作することができているか。伝わる表現をすることができたか。鑑賞の対象として選ばれた部分も評価に加味するとともに、他の生徒作品に対する鑑賞文も作品及び説明文を読んだ上での鑑賞文となっているかを評価対象としている。この内容については、生徒に告知した上で授業を実施している。今後はルーブリックを作成し、活用していくべきだと感じている。

４．授業及びワークシートの結果から

次ページの図１のように、和歌に詠み込んだ、または、詠み込まれている景色や自らの心象を絵に描き、その上で、特徴的な部分に線をつけて、散らしの構図を作成させている（図２）。自らが選び、和歌にした『伊勢物語』の１場面であるため、前後の話を思い出しながら作成している。絵が苦手な生徒はイメージを形にすることが難しかった。しかしながら、絵は補助的なものであり、イメージを図に示していくことが主目的であることを説明すると、何とか描きあげることができた。また、作品化していくために、検字し、当てはめながら散らしを構成していく中で、自ら構成を修正しながら、どうすべきかを悩み、近くの生徒や指導者に相談する積極的な様子も見られた。創作に興味を持って臨むことができており、後の漢字仮名まじりの書に繋がる態度が形成できたと感じる。

多くの生徒は作品をじっくり見て、説明文に書かれていることを感じ取ろうと努力していた。また、他の生徒の発想や表現を楽しむことができたようである。

「創造力が膨らんで楽しかった」や「考え方や捉え方が少し違うだけで、全く別のものになることがわかり、すごく面白かった」という感想が出てきたことは喜ばしいことである。

図１

図２

図３

右　図３下部内容 和歌　ぬばたまの　闇の夜のうち　雷と　供に消えつる　我白玉よ 意味　闇の夜のあいだに雷が去ってゆくのと同時に自分の好きな女性も消えていってしまった様子 説明文　和歌の白玉とは主人公の好きだった女性のことです。散らし書きは上のまとまりは雷の表現をしていて下のまとまりは葉とそれにつく露を表わしています。下部“わ”と”かしら”、“た”と“まよ”をくっつけたのは葉によりそう露を表現したかったからです。また「わ」と「よ」は丸みをもたせて露らしくしました。上部の連綿は雷の勢い、下部の連綿は葉のしなやかさを表現しました。場面が闇夜なので墨の濃さも濃くして暗さを表現しました。

鑑賞会は、「自らの和歌とその意味」や「説明文」を記入する欄を設け、本人に記入させた。（図３下部）そのため、制作した和歌をじっくりと読みながら、どのように表現したのかを真剣に鑑賞することができていた。また、その中から４首、自分の気に入った作品を選び、鑑賞文を書かせた。

※　鑑賞文（一部抜粋　生徒文章まま）

A　女が消えていってしまうのを墨の薄さで表現している点が良かった。「消えはてた」で２人の壁をつくっているのも２人の悲しさがより伝わってきた。

B　女と男の気持ちの表現を文字のつながりや散らし方から表現されていて良いと思う。あえて単語を一つひとつを離しているところもインパクトがあって良い。

今回、説明文については、詳細に意図を書かせすぎたように思う。しかしながら、初めての創作ということもあり、生徒は様々な要素を盛り込もうとしすぎている。そのため、ある程度説明を書かないと伝わるものが少なすぎて達成感を感じられない。鑑賞する生徒、表現する生徒の互いが初学者である以上、ただの上手下手と結論づけてしまわないよう、説明文に意匠を凝らした部分を書かせた。

鑑賞においても「作品をじっくり見る」や「作品から受ける印象を言葉に表わす」などの基本練習の繰り返しが重要だと考えるからである。生徒同士の作品である以上、どこにどう工夫されているかを知った上で見るということが、自らの表現方法の改善につながると考えられ、初学者には必要であると考えた。

鑑賞会中の様子

書道教室の中心部分に作品を並べ、両側に分けた自席に戻って鑑賞文を記入するようにさせた。じっくり見て、記憶してから席に戻る必要があるため、真剣に見ている様子がうかがえる。

５．課題と展望

国語総合で作成した和歌については、高校１年生のものであり、文法的な間違いや和歌として崩れてしまっているものもあった。それでも、生徒自身が考えた和歌であり、修辞技法を入れたものであるため、真剣に仮名作品にしようという思いで臨むことができていた。また、鑑賞会において、どのような風景を詠んだのか、イメージを読み取ろうと真剣に作品を見たり、説明文と作品を照らし合わせたりしてじっくりと作品を鑑賞し、鑑賞文を書くことができた。

誤字や字形の誤解、連綿学習の不十分さ、文字のチェックが行き届いていなかった部分が後になって見つかるところもあった。一層の注意が必要である。仮名古典の学習として捉えると、改善すべき点が多々ある。しかしながら、今回の授業の主眼は作品創作の態度を学び、実際に創作してみることで、意図を表現する難しさやどこを工夫しているかなどを体験し、鑑賞の眼を養うことにある。鑑賞の基本はやはり、じっくりと作品を見て思考する点にあり、その際にどのような点を見れば良いのか。それに気付くことが授業の成果であろう。その点においては、今回は目標を達することができたように思う。

ただ、今回の鑑賞は一般的な作品に対してのものであって、古典の鑑賞とは異なるものである。書の古典は実用の中の書や石碑等に残すための書が多く、飾って鑑賞することを目的として作られたものばかりとは言い難いためである。今後はその違いについての指導が重要となってくる。

検字と連綿を考えたり、調べたりする作業の中で、iPad やコンピュータなどの情報機器を利用しながら作業することも考えたが、どのような画像編集ソフトやアプリを使用するかの検討が済んでいなかったため、今回は見送った。上手く活用することで、創作の展開がより容易になるのではないだろうか。今後の課題としたい。

平成27年度はこの授業の後、漢字仮名まじり作品創作をしており、構成や配置に意図を持たせることをテーマに行った。他の作品や、古典作品の鑑賞まで発展させていけると良かったのだが、授業の都合で間に合わなかった。

平成28年度は仮名の学習の開始時期を早めているので、様々な作品鑑賞に発展させていきたいと考えている。

６．参考

・高等学校学習指導要領解説　芸術（音楽　美術　工芸　書道）編　音楽編　美術編　文部科学省
教育出版株式会社（平成21年12月初版）